

---

# ヘブンワールド

響虞蚰 顧蛇櫓鵲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヘブンワールド

### 【Nコード】

N0460A

### 【作者名】

轡虞蜘蛛 顧蛇櫓鵜

### 【あらすじ】

どうも、轡虞蜘蛛<sup>ひぐちちゅう</sup>です。本名は、樋口一滝<sup>ひぐちいちゅう</sup>19歳。バリバリの大学生です。えー、僕<sup>ぼく</sup>が書く物語は、2人の少年の話です。主人公は2人の少年の1人樋口翔<sup>ひぐちしやう</sup>。実は僕の弟と同じ名前なんですよ。で、その彼が毎日毎日同じことの繰り返しに飽きて何かすごいこと無いか考えていたある日、事件は起こった。気が付いたら知らない所で皆と違う時間を過ごす羽目になって、その世界から元の世界に戻る方法を探すと言う物語です。少し説明不足かもしれないと思いますけど、これからよろしくお願いします。

## 転・世界

こんにちは。主人公の樋口翔ひぐちしょうです。

中学3年生で、3月26日生まれの15歳。O型。

突然ですが、皆さんは毎日毎日同じことの繰り返しに嫌気が差したことはありませんか？

もしここで「無い」と答える人がほとんどでしょうが、僕のような1部の人は「有る」と、答えるでしょう。

そう。僕もあの日こんな事を考えていた。

「はあゝ。何で毎日毎日おんなじことの繰り返しなんだ。」  
と・・・・・・・・・・・・・・・・。

しかし今では、普通の平凡な毎日が懐かしい。

「なぜ？」とここで思った人は本編を読んでください。

思わなかった人も、できれば本編を読んでください。

まあ。これを読んでどうと言う事は無いですけど・・・。

あつ、もうこんな時間だ。

では、僕は学校へ行かなくてはならないんで・・・。

続きは本編で会いましょう。サヨウナラ・・・。

## ワールド・チェンジ

「じゃ、いつてきまーす。」

4月16日

僕はいつもどおりに家を出た。

そう、何も変わる事のないいつもどおり・・・のはずだった。

今日までは・・・・・・・・。

（はあ、何でいつも同じことの繰り返しなんだ。なんか変わった事いかな。）

僕はあの時までにはいつもこんな事を考えていた。

まさかこの願いが叶ってしまうなんて知らずに…………。

8時10分…………。

この時間は新宿駅の山手線13番線ホームで、電車を待っているはずだったが、

なぜか今日に限って携帯電話に非通知で電話が来た。

（誰だろう、こんな時間に。こう言う時は名乗らないんだよな。）

と思いつつ電話に出た。

「はい、もしもし。」

「あ、翔。オレだけだよ。」

「あの、どちら様ですか？」

「あつ、ああ。わりー大島だ。おおしま」

電話は大島からだった。

「あ、なんだ大島か。何も非通知でかけて来るなんて、で何か用。」

「お前ホント冷たいよな。用があるから電話したんじゃない。」

「そうだけどさ………」

「ハハハ、まーいいや。じゃ言よ、あの………」

たわいも無いことをこんな感じでやり取りをしていた。

もしかしたら彼と話すのは、最後になるかもしれないとは知らずに。

8時13分

運命の時間。1本遅れた電車に乗ることにした。

「まもなく、13番線に電車が参ります。黄色い線の内側までお下がってください。」

アナウンスが流れたので、僕は少し身を乗り出した。

あと少しで電車来ると言う時に、何かが背中当たった気がした。

僕はバランスを崩して線路へ吸い込まれように落ちていった。

その時ホームから線路へ落ちる僕に向かって1人の男の人が飛んで

きた。

「パアパアア」

大きな電車の音が聞こえた後僕は意識を失った…………。

あれからどれくらいの時間が過ぎたのだろうか。

ぼくは、薄っすら意識を取り戻した。

「ザザーン ザザーン」

（波の音？）その時大きな波の音が聞こえた。

足が何か温かい水に漬かっている様だ。

「ううう…………いでえ」

体を動かそうとしても痛みで動かないし、おまけに何か重いものが乗っている。

と、その時何か音がした様に思えた。

よく耳を澄ましてみると…………、



「ザッ ザッ ザッ ザッ ザッ ザッ」

確かに誰かが砂浜を歩いている感じでこっちに来る。

足音が近ずいたと思うと、急に音が止んだ。

不思議に思い顔を上げようとしたけど、また意識が遠のいてく。

そしてそのまま意識を失った。

今度は割りと早く目覚めた。さっきとは違って布団に寝かされていた。

体を起こして周りを見回してみようとしたが、まだ痛みが引かなくて断念した。

すると何処からか、

「あ、気が付かれましたか？」

と1人の女の人が後ろから言った。

僕はビックリしつつも返事をした。

「え！？・・・・・・あ、はい。」

「そう。それは良かった。」

そう言っていると彼女は僕の前に出てきた。

（割と僕の好みかも、何て綺麗な人なんだ・・・・・・じゃなくて。）

「あの・・・・ここはどこですか？」

と考えた割りには僕が尋ねたことは単純だった。

すると彼女は少し困った顔をしたかと思うと微笑みながら、

「ここですか？ここは天国です。」

そう言った彼女の言葉の意味は、僕は分からなかった。

## ワールド・チェンジ2

僕はもう一度彼女に聞こうと思ったその時

「おおー、気が付いたか。良かった良かった。」

ひととき大きな声で言われたのでビックリしながら後ろを向くと、そこには身長175〜180cmぐらいのスポーツマン系の男が立っていた。

服装は僕と同じで学生服だ。

「あの、どちら様で？」

少し声を潜めて聞いてみた。

「ああ、俺の名前は志摩<sup>しま</sup> 稜<sup>りょうた</sup>詫。こう見えても、中3だ。で、君の名前は？」

「僕の名前は樋口翔。あなたと同じ中学3年生です。」

「へー、オレと同年か。」

「えーとあの・・・あなたここが何処だか知っているんですか？」

「知ってるさ。ここは『天国』なんだから。」

正直驚いた。あまりにも即答すぎていたからだ。

彼が答えたとき、（もしここが本当に『天国』だったら、少なくとも死んでしまっている事になる。）と、思うと急に胸が痛くなった。

「おい、大丈夫か？顔が青いぞ。」

「また具合が悪くなったのでしょうか。少し横になったほうが良いのでは？」

「大丈夫です。少し目眩がしただけですから……」

（でも何かおかしい。何で死んだはずの僕が怪我をしているんだ？）  
ふとこんな疑問が浮かんた。

「はあゝ。俺まだやりたいことが沢山あったのにな。」

その時彼が言った。少し悲しそうな顔をして……。

「まだ死んだと決まった分けじゃない。」

何故か彼の言葉が気にかかってついこんな事を言ってしまった。

「何でそんなことが言えるんだ！」

彼が口を尖らせて怒った口調で言った。

僕は少しビクリしてしまっただけで考えた言葉を言えなかった。

「そ、そんな事言われても……」

「だろ。根拠も無いのにそんな気安めなことは言わないでくれ！」

「そんな言い方は無いだろ。僕だって本当は……」

「本当は・・・何だよ！そもそもお前が線路に落ちなきゃこんな事には、」

「じゃ、じゃあ。死んだのは僕名のせいだって言うのかよ！」

「そうだ。お前のせいだ。」

「僕だって落ちたくて落ちた訳じゃない。何かが背中に当たった反動で、」

「それだって同じことだ。腕が当たったぐらいで落ちるなんて。」

「腕がつて、何でわかんだよ！」

「そりゃ簡単だ。当たったのは俺の腕だからな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え！？」

「だから線路に落ちるお前をかばおうとしたんだ。無駄だったけどな。」

言葉を失った・・・何も言わずに外に飛び出た。2人が何か言っているのも耳に入らなかった。

## ワールド・チェンジ2（後書き）

この話はかなり短くてすみません。

もしこの小説に対しての苦情や感想があつたら遠慮せずにバンバン送ってください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0460a/>

---

ヘブンワールド

2010年10月8日23時04分発行